

はじめに

すやすやと眠る子どもの寝息。これほどまでに優しくて柔らかくて、静かで安らかな呼吸というのも、この世には存在しないだろう。呼吸不全の患者さんの呼吸も、みんなこうであつたらいいのに。僕はいつも、そう思っている。

僕が医師になりたての頃、術後イレウスを背景とした吐物誤飲により、ARDSを発症した患者さんを亡くした。僕らは、真っ白になった肺を相手にこれでもかというくらいに頻回にガスを押し込み、無理くりにも換気をさせて血液ガス所見の体裁を整えていた。その時の患者さんはとても苦しそうで辛そうで、とても見るに絶えなかった。その後の僕の脳裏には「ダメになった肺にガスを押し込む治療で、本当に人は良くなるのだろうか？」という疑問がつきまとい、僕の残りの研修生活は「肺に優しい呼吸」の探求に費やされていった。

ECMOに出会ったのは、研修医を終えた2011年のことだ。スウェーデンのカロリンスカ大学ECMOセンターに出向くと、そこにはECMOを装着しながら居眠りをする老婆の姿があった。その胸元には、読んでいたはずの文庫本がそっと手を添えられて置いてある。その老婆の呼吸があまりに静かで、あまりに優しく、これだと直感した。「どうやって肺に優しい換気をしようか？」を考えていた時代から、「どうやったら肺を使わずに呼吸ができるか？」を考える時代に突入した瞬間だった。

あれから7年。僕はECMOフィジシャンとして生きている。エヴィデンスに乏しいと述べる識者から厳しい指摘をいただくことも多々あるが、僕はECMOをつけて居眠りをする患者さんの寝顔が純粹に好きだ。隣で眠る娘の寝息は、まるでお手本のように、僕はいつもそんな呼吸に憧れて、ECMOと共にチャレンジを続ける。

2018年2月

前橋より
著者を代表して
小倉崇以